

## 地誌学の問題点—エリアスタディとの関連において—

森 川 洋\*

### Some Approaches to Regional Geography and Area Studies

Hiroshi MORIKAWA\*

これまで、広島大学総合地誌研究資料センターではインドを中心に地誌研究を続け、南アジア地域についてかなりの成果をあげてきた。今回、同センター長藤原健藏教授が退官され衣替えしたのを機に、地誌学そのもののあり方について考察してみたい。それは、今日地誌学のあり方が問われており、将来の研究をどのように位置づけ、考察すべきかについて考える時期にきていると思われるからである。

周知のように、論理実証地理学が華やかであった1960年代には、地誌研究はきわめて軽視され振るわなかった。1970年代後半以降になると地誌学のルネッサンスがおこり<sup>1)</sup>、欧米諸国—とくに英語圏・フランス語圏—においても地誌学の再興をめざして種々の研究が発表されるようになった(森川,1992)。しかし、私の管見の限りでは、この問題について多くの研究者がともに考えたのは、1987年10月にオランダのユトレヒト大学で「地誌学の存続と再構築」を求めてゼミナールが開催されたのと、1990年に Johnston *et al.* (1990) によって新たな地誌概念を求めた編書『地誌学—今日の発展と将来の展望』が刊行されたのがあるだけのように思われる。わが国では新しい地誌学を求めた研究が皆無ではなく、石田 寛教授(当センターの前身研究資料室の初代室長)が国際地理学会東京大会(1980年)の地誌部門コンヴェーナーを務めたときに国外・国内の著名地理学者にアンケートを発送して地誌学に対する意見を聴取して編集したものはあるが(Ishida, ed. 1980, 1982)<sup>2)</sup>が、シンポジウムが開催されたことはない。この問題に関するシンポジウムを開くには、本センターが最もふさわしいものと考えられる。

したがって、本年度の事業計画の中心にこのシンポジウムを開催することを計画し、内外の第一線で活躍する研究者にご報告を願うことにした。幸いにして福武学術文化振興財

---

\* 広島大学総合地誌研究資料センター長 ; Director, Research Center for Regional Geography, Hiroshima University

団からの学会・研究集会助成金をえることができたし、国内の予定した報告者のご賛同をえることができた<sup>3)</sup>。このシンポジウムを『地誌学とエリアスタディー現状と課題-』としたのは、隣接科学として躍進著しいエリアスタディとの関係に注目し、地誌学のみならず広くこの方面の研究動向を知ることにある。エリアスタディの分野では高谷好一氏に発表を依頼し、また、学内でも地域研究において地理学の人たちと同じ講座に属する佐竹昭氏に参加を願うことにした。まずは貴重なご報告をいただいた6名の報告者と当日座長をつとめていただいた米田 巖氏（広島大学総合科学部）と岡橋秀典氏（同文学部）、ならびに本計画にご理解下さった福武学術文化振興財団に対し、厚くお礼申し上げたい。

さて、今回のシンポジウムでは次の4つのテーマを提示し、オーガナイザー（森川 洋・岡橋秀典）の一人としての責任を果しておきたい。

- (1)「地誌学について社会的要求はあるのか、あるとすれば社会は地誌学に何を求めているのか、それに対して地誌学は今後どう対応していくべきか」

これはきわめて重要なテーマと考える。今日では交通通信技術の発達によりモビリティの高い社会が到来することによって、人々の世界への関心が高まってきた。テレビのクイズ番組でも外国の地理的情報が氾濫するようになってきた。世界の経済再編と地域分化過程の複雑さに対する認識の高まりや、地理学の重要性に対する評価が新しい地誌学を希求するようになった（Bradshaw, 1990）。そこでは1つのまとまった方向よりも種々の方向から地誌学の再興が求められている。また地理学の内部においても、身近な home region だけの研究では近視眼的な理論・法則の追究になりやすく、すべての現象を既存の理論や法則でもって一般化してしまう危険性があるところから、地理的好奇心に再び灯をともし、世界の果てにも眼を向けるべきだとする意見が高まってきた（Johnston, 1985）。Johnston（1984）は general と unique<sup>4)</sup>との研究のバランスをとることが必要であると述べたが、旧西ドイツでも Schöller（1982）は複数のアプローチを支持し、同様のことを考えていたように思われる。

上述したように、戦後の地誌学をめぐる状況はきわめて厳しい。旧西ドイツでは、1969年の大学紛争さなかに開催された地理学会キール大会においては、Bartels（1968a, b）がその前年に発表した著書・論文に依拠して、学生や若い研究者は「地誌学は偽学問だ、地誌学が求めるのは空想的な全体像（fiktive Ganzheit）であり不毛（unfruchtbar）の話に過ぎない」ときびしく非難した。Bartelsはその論文のなかで「外国について新たな情報をうるのはジャーナリストに任せるべきだ」、そしてまた、「そうした情報はすぐに古くなり、学問的研究には無意味である」と主張していた<sup>5)</sup>。しかし晩年の1981年には、ジャーナリストの扱う新情報は断片的で商業主義に根ざしたもので、地理教育に必要な体系的な

知識を供給しえないと考えるようになっていた (Bartels, 1981)。このキール大会以後旧西ドイツでは水面下に別の動きが起り、むしろ地誌書の刊行が活発に行われるようになった (Bahrenberg, 1979)。

これまで地誌学の主たる貢献は、地理教育にあったし今日でもそうあると思われる。子供たちに世界の状況を正しく教え、正しい世界観を与えることは国際理解ひいては世界平和の基礎である。論理実証主義地理学は分析方法の精緻化にはつとめたが、その反面、各地域の世界的な位置づけや自然条件との関連による地域現象の考察を軽視することとなった。したがって、地誌は地理教育のなかでは依然として重要な地位を占めており、有用性は大きいといえる。さらには、世界を知るための用具としてだけでなく、世界の空間的公正 (spatial equity) を高めよりよい世界をつくるために貢献すべきであるというより積極的な意見もある (Gilbert, 1988)。

また、新しい地誌情報についてはたしかにすぐにはなすが、それでもって地誌研究は不要であるとはいえない。むしろ、ちょうど県史や市史などが20年とか30年の間隔で書き換えられているように<sup>6)</sup>、たえず新たな知識を供給することによって社会の要求に応えるべきではないかと考えられる。その点では、外国地誌と国内地誌はやや異なった目標をもつように思われる。外国地誌は外国の現状を正しく紹介することに大きな意義があるのに対して、国民周知の地域としての国内地誌については地域の解釈に比重がおかれるであろう。そうした問題もあるが、社会の要求に対して地誌学 (地理学) がこれまで十分に伝えてきたといえるかどうかは疑問である。地誌学よりも他の隣接科学や外務省<sup>7)</sup>の方がそうした要求によく対応しており、後退した地理学者の研究領域には隣接科学やジャーナリストが進出している (Hauer *et al.*, 1990)。地理学者にとっては失地回復の努力が必要であろう<sup>8)</sup>。

## (2) 「地誌学はどのような視点から研究すべきか、どのような内容をもつべきか」

これまで地誌研究の長い歴史のなかでは、自然環境との関係において人間生活の地域差を捉え、それぞれの地域の特性を総合的に究明することを目標としてきた。自然環境を前提として地域形成に関連する種々の要因間の関連性を考察したコロロギー (Chorologie) であった。しかし、その場合には、地域変化を幅広い世界的変化の過程として十分に説明することができなかった。例えば、Hudson (1990) はヴィダル地誌学における地域変化に関する説明を不十分なものとして認めている。それに対して、新しい地誌学は社会科学的地誌学 (social-scientific regional geography) であり、自然との関係よりも世界システムとの関係を重要視し、世界経済の動きのなかで各地域の特性と変化の状況を明らかにすべきであるという考え方に基づくものである。地誌学の目標は、資本主義的生産様式の

拡大のもとで、それぞれの場所の今日おかれている状況を理解することにあるといわれる (Johnston, 1990)。

イギリスでは、経済再編成が地理的にいかに異なった影響を与えるかを検討するために、ロカリティ研究 (locality studies) などの新たな試みもなされているが、それによって、全体的な地域の動きを把握することはできたとしても、全国7地点の分析では空間性の認識には疑問が残る<sup>9)</sup>。また、地域形成にかかわる特定個人の役割をどう扱うかについては構造化理論 (structuration theory) が重要視され、いくつかのモデル的な研究も発表されてはいるが (森川, 1992)、まだ新しい研究に関する統一的な枠組みができたとはいえない。

従来地誌学では、自然環境と関係をもつ範囲で種々の項目が検討され地域的統合 (regional synthesis) が論じられたが、場所 (地域) は社会的に生産され再生産されると考える新しい地誌学においても、自然との関係が完全になくなってはいえない。地域形成の重要な営力として社会が加えられ、地誌は人間、社会、自然の三角関係の上になりたつとみることができる (Gilbert, 1988)。したがってそこには、その場所のもつ自然条件や「外部の大きな力」をどのように位置づけて考察すべきかが重要な問題となる。

さらにまた、人間活動や経済活動を中心に、世界の変化のなかでその地域のおかれている状況を記述し説明する新しい地誌学においては、どのような範囲をどのように記述するかについても検討すべき問題である。地誌研究においては、地域の経済的な生産構造、文化的パターンや政治的関係をどのように記述し説明するかという問題と同様に、とりあげる範囲も研究者によって異なるものと思われる。それぞれの地域に関する情報をできるだけ総合的に集めてアレンジし、著者による解釈が加えられ取舍選択が行われる。その点では、地誌学の研究方法は歴史学や人文主義地理学の場合と類似した方法論に基づくものと考えられる。

### (3) 「地域はどう捉えられるべきか」

先に触れたように、「地域なき地理学」は大きな欠陥をもつものと考えられている (Schöller, 1982; Johnston, 1984)。しかし、地域の重要性を主張する場合には、その捉え方が問題である。1954年にアメリカ地理学会から刊行された『American Geography』においては、地域概念が検討され明確に整理され、等質地域、結節地域や統一地域、さらには総合的地域としての compage (統域) についても論じられた。ドイツでも統合性の強い地域としてラントシャフトが古くから論じられてきたが、実証主義地理学が華やかになるにつれて地誌学が衰退し、地域概念に関する研究も減少してきた。

Gilbert (1988) は地域の見方として、①資本主義化過程への局地的対応としての地域、

すなわち社会的分業の地域化<sup>10)</sup>、②アイデンティティとして意識された地域、③社会的相互作用の手段としての地域（テリトリー）<sup>11)</sup>をあげているが、現在の地域の構造（structure）だけでなく変化過程（process）としての地域の動態的分析も重要視している。

しかも、従来は地域を周辺から切りとって考察することが行われてきたが、部分地域は相互作用によって結合した全体（interacting whole）の要素とみるべきである。Johnston（1984, 1985）は、世界は場所のモザイク（mosaic of places）からなるとしているが、各地域は結合して地域システムを形成しており、無秩序に配列した単なるモザイクではないはずである。Johnstonがあえて場所のモザイクと呼んだのは、地域間の結合をシステム分析を適用して検討することによる目的論的な説明を避けるためであった。

しかしシステム分析を適用する場合には、都市が地域形成・発展の原動力であり、「外からの大きな力」を伝達する仲介者であると考えられるので、地域システムの構造を分析するには、都市システムにおける結合構造が重要な役割を果たすであろう。今日の世界では、3極構造をもった世界都市（world city）を中心とする地域システムが形成されつつあり、それとの連結関係によって地域の位置づけがなされていると考えられる。こうした世界システムの空間構造に関する研究は、従来の地理学の不得意な分野であり、十分な研究の蓄積があるとはいえない。今後必要なことは、これまでの単純な結節地域や等質地域の分析ではなく、全体的な世界システムの空間構造のなかに地域を位置づけることであろう。Hauer *et al.*（1990）は世界システムの空間構造に関する研究を地誌研究のフロンティアの1つにあげている。たしかにそれは、地域発展に関する研究や地域的アイデンティティの研究とともに、地誌研究のなかで扱われるべき分野であろう。

#### (4)最後に、「地誌学と隣接科学との関係はどうあるべきか」

隣接科学のなかでは、エアスタディとの関係が特に重要である。大友（1993）によれば、エアスタディは本来独立した学問分野の研究を特定地域について進めていくうちに、その研究が地域の自然、社会、文化などと深く関わっていることに気づき、地域に関心をもつようになった人によって行われている。したがって、地誌学が多面的で羅列的に地域の特性を把握しようとするのに対し、エアスタディは研究者が関心をもつ特定地域において、その専門とする学問的対象をその地域の自然や社会、文化などと関連づけて研究する点で相違する。すなわち、単一事象を中心にしてそれと他の事象との関わりから地域の個性を追究しようとするところに特色がある<sup>12)</sup>。

地誌学では大小種々な空間的スケールでもって地域を構造的に捉え、それぞれの地域の特性（現状）を明らかにし、地域内の各部分地域の比較を試みてきた。それに対して、エアスタディは地域研究では地球上の特定地域を考察するという以外は、空間的視点はほ

とんど考慮されない。しかも、その単位はマクロで小さくてもせいぜい国単位とされている（高谷，1993）。しかも、地誌学よりもずっと幅広く、政治や文学、住民のものの考え方に至るまで広い範囲を含めて研究の対象としている。上述したように、地誌研究においては地域構成要素間の関連を踏まえた地域の総合的把握が重要な問題となってきたが、こうした幅広い研究テーマ間の関連性がどのように関連づけられ検討されているのか興味ある問題である。

こうした問題は、今日の大学の制度のなかにも反映されている。今日のわが国の大学では、既存の学問の統合と再分類において世界をエリアごとに区分して研究者をまとめる方法がとられている。例えば広島大学総合科学部では総合科学科のなかに日本研究、アジア研究、ヨーロッパ研究などがある。この各グループ内における各学問間の交流はどのようになされているのか、なされるべきかは同様に重要な問題である。

地誌学（地理学）の立場からすれば、学問内容の面でも制度の面でも、エリアスタディとの関係をいかに考えるかが問題となる。地誌研究はより幅広いエリアスタディの一部として包括されるべきであろうか。最近、ドイツでは日本を紹介したマイヤー・ポール編の『外国情報—日本：地理，歴史，政策，経済，社会，文化』が刊行された（Mayer u. Pohl, 1995）が、そのなかに地誌の章があり、Flüchter, W. 教授が担当している。ただし、「地理学的問題提起，構造と諸問題」と題する彼の執筆部分は位置や自然との関係などが主で、経済や社会については別の担当者に任されている。このように、地誌はエリアスタディの一部を構成し、それに含まれるべきなのか、それとも地誌学（地理学）にはエリアスタディとは異なった部分があるのか、あるとすれば、両者の関係はどのようにあるべきかが問題となる。

以上のように、私はここでは4つの問題を提示したが、これ以外にも種々の問題が考えられよう。私があげた問題に必ずしもこだわる必要はない。上述のように、こうしたテーマでシンポジウムが行われるのはわが国ではほとんどはじめてのことであり、地誌学やエリアスタディの現状を知り将来の課題を考えることだけでも、大きな意味があると考えられる。

本シンポジウムでは6人の報告者の報告だけでコメンテーターがいない。それは、限られた時間のなかでそれぞれの報告者にかなり時間をかけて報告していただき、その後に報告者相互の議論やフロアとの議論を活発にするためである。

## 注

- 1) Pudup (1990) によると、1980年代における地誌学への関心の高まりは伝統的地誌学の再生と新しい地誌学の構築の2つの方向から生じたという。ただし地誌学に関する関心は高まったが、地誌研究者が

- 増加しているかどうかは疑問である。旧西ドイツを例外として欧米諸国では外国研究は少なく、しかも減少している (Johnston, 1985)。イギリスでは外国研究者は増加しているとはいえないし、1992年の大学改革 (学生数の増加と少数教室だけの重点的予算配分) のもとで、すべての学問において研究者の自由な研究の困難化など研究環境は悪化しており、地誌学の研究にとっても決してよい影響はないものと推定される (Johnston, 1995)。
- 2) わが国のこれまでの地誌研究については中山修一氏の詳しい報告がある。
  - 3) 海外の研究者1名を招待し講演を願う計画であったが実現しなかった。
  - 4) ユニークとは、他に事例がないという点では peculiar であるが、一般的過程と個々の対応との特定の結合によって説明されるものをさす。singular は一般的説明が全く妥当しないものをいう (Johnston, 1984)。地域のユニークさは、その地域を構成する要素間のユニークな組織を意味する。ドイツでは、Bahrenberg (1979) のように地誌学 (Länderkunde) と地域地理学 (regionale Geographie) とは同一ではないと考える人もある。地域地理学は経済学や政治学などが現実の問題を説明する場合と同様に、1回限りの現象を一般地理学を用いて説明しようとするものである。したがってそれは、Johnston (1984) のいうユニーク概念とほぼ一致するものと考えられる。
  - 5) Bartels は、この他にも主題地誌の研究では甲乙いずれがよいか優劣の判定が不能であり、科学的でないと述べている。
  - 6) わが国では、世界地誌講座は古今書院『世界地理』8巻が1959年、朝倉書店『新世界地理』12巻が1960年、大明堂『世界地誌ゼミナール』9巻が1971年頃に刊行されて以後長らくでていない。週刊朝日百科『世界の地理』全12巻121冊が出版されたのは1984年である。
  - 7) 周知のように、国内ではどこの書店でも地理学や地誌のコーナーはほとんどなく、隣接科学の研究成果の方が幅をきかせている。また例えば、外務省欧亜局監修 (1993) なども刊行されている。
  - 8) ただし、外国調査は資金をとまなう問題であることを忘れてはならない。ドイツ以外の欧米諸国で外国地誌研究が振るわれないのは資金不足と全く無関係とはいえない。
  - 9) ロカリティ研究の欠点については、①理論的概念が不足している、②経済的変化と文化的政治的变化の関係を説明することが欠けている、③ローカルレベルの集中的な検討によって、世界経済の決定的変化や国レベルの見方を誤る (Jones, 1988)、④あまりに構造主義的で、個人の日常生活形態の分析が少ない、などがいわれている。
  - 10) 先進諸国にも中心と周辺地域があり、途上国にも中心と周辺地域があり、前者の周辺地域と後者の中心地域との競合関係が生じている。円高による海外への企業移転はまさにこうした問題である。
  - 11) 社会のなかでの支配や権力の役割が地域分化の主要因であるとするもので、地域はテリトリーのかたちで現れる。Gilbert (1988) は都市を中心とする結節地域概念には触れておらず、結節地域は含まれないものと考えられる。
  - 12) 脱稿後刊行された応地 (1996) に詳しい説明がある。

## 文 献

- 応地利明 (1996) : 地誌研究と地域研究－認識論的ノート。西川 治編 : 『総観地理学講座 I 地理学概論』朝倉書店, pp.229-249.
- 大友 篤 (1993) : 地域科学と地理学。山田安彦教授退官記念論文集記念会編 : 『転換期に立つ地域の科学』古今書院, pp.270-275.
- 外務省欧亜局監修 (1993) : ヨーロッパ各国要覧。外務省。
- 高谷好一 (1993) : 「地域」とは何か。矢野 暢編 : 『地域研究の手法』(講座現代の地域研究1) 弘文堂, pp.23-45.
- 森川 洋 (1992) : 地誌学の研究動向に関する一考察。地理科学, 第47巻第1号, pp.15-35.
- Bahrenberg, G. (1979): Anmerkungen zu E. Wirths vergeblichen Versuch einer wissenschaftstheoretischen Begründung der Länderkunde. *Geogr. Zeitschr.*, vol.67, S.147-157.

- Bartels,D.(1968a):*Zur wissenschaftstheoretischen Grundlegung einer Geographie des Menschen*. Geogr. Zeitschr. Beihefte H.19. 225S.
- Bartels,D. (1968b) : Die Zukunft der Geographie als Problem ihrer Standortbestimmung. *Geogr. Zeitschr.*, vol.56,S.124–142. *Wiederabdruck in*: Winkler,E.Hrsg. (1975): *Probleme der allgemeinen Geographie*. Wege der Forschung. Wiss.Buchgesell.,Darmstadt,Bd.CCIC,S.315–337.
- Bartels,D.(1981):Länderkunde und Hochschulforschung. *Kieler Geogr. Schriften Bd.52 (Beiträge zur Theorie und Methode der Länderkunde. Oskar Schmieder zum Gedenken)*,S.43–49.
- Bradshaw, M.J. (1990) : New regional geography, foreign–area studies and Perestroika. *Area*, vol.22,pp.315–322.
- Gilbert,A.(1988):The new regional geography in English and French speaking countries. *Progress in Human Geography*, vol.12,pp.208–228.
- Hauer,J.,Hoekveld,G.A. and Johnston,R.J.(1990):Epilogue: towards an agenda for regional geographical research. Johnston,R.J. Hauer, J. and Hoekveld,G.A. eds. :*op. cit.*,pp.208–216.
- Hudson,R.(1990):Re-thinking regions: some preliminary considerations on regions and social change. Johnston,R.J.,Hauer,J. and Hoekveld,G.A.eds. :*op. cit.*,pp.67–84.
- Ishida,H.ed. (1980): *To rejuvenate regional geography*. Research and Sources Unit for Regional Geography. Univ. of Hiroshima, Special Publication, No. 7, 67p.
- Ishida,H.ed. (1982): *To rejuvenate regional geography (II)*. Research and Sources Unit for Regional Geography, Univ. of Hiroshima, Special Publication, No. 11, 72p.
- Johnston,R.J.(1984):The world is our oyster. *Transact.Inst.Brit.Geogr.*,NS. vol.9, pp.443–459.
- Johnston,R.J.(1985):To the ends of the earth. Johnston,R.J. ed: *The future of geography*. Methuen, London, pp.326–338.
- Johnston,R.J.(1990):The challenge for regional geography: some proposals for research frontiers. Johnston,R.J., Hauer,J. and Hoekveld,G.A.eds. :*op. cit.* ,pp.122–139.
- Johnston,R.J.(1995):Geographical research, geography and geographers in the changing British university system. *Progress in Human Geography*, vol.19,pp.355–371.
- Johnston,R.J., Hauer,J. and Hoekveld,G.A.eds.(1990):*Regional geography. Current developments and future prospects*. Routledge,London,New York, 216p.
- Jones,A.(1988):A new regional geography of localities? *Area*,vol.20,pp.101–110.
- Mayer,H.J. u. Pohl,M.(1995):*Länderbericht Japan. Geographie, Geschichte, Politik, Wirtschaft, Gesellschaft, Kultur*. Studien zur Geschichte und Politik, Schriftenreihe Bd.324, Bundeszentrale für politische Bildung.
- Pudup, M. B. (1990) : Arguments within regional geography. *Progress in Human Geography*, vol.12,pp.369–390.
- Schöller,P.(1982):Zu Standort, Sinn und Aufgaben deutscher Ländeskunde. *Ber.z. deutsch.Landesk.*, vol.56,S.179–187.